
落花

elephantom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落花

【Nコード】

N7027X

【作者名】

elephantom

【あらすじ】

凶悪な犯罪者が収監されるR刑務所。
看守による囚人虐待が横行する中、
刑務官として真面目に勤める間島と、死刑廃止運動が進む中で死刑囚として収監された川島。決して分かり合っていない場所で微かに芽生えた友情……

種（前書き）

恋愛的要素は一切ありません。
暴力的な表現を含みますのでご注意ください。

種

「今日は新人が入るから気を引き締めるように」と、私よりも4年先輩にあたる笹森さんに出勤早々言われた。

名前は明かすことが出来ないが、ここは重犯罪を犯したものが収監される刑務所で、

M刑務所としておこう。

名前を明かせない理由は色々あるのだが、

主となる理由としてはこの刑務所内では看守による収監者への虐待が頻繁に行われているからだ。

誰も止める者はおらず、犯罪者への制裁という大義名分がまかりとおっている。

私の名前は間島まじま いねつく稲継。

このM刑務所へ配属されてから2年だが未だに慣れはしない。

勉強だけが取り柄で、学生時代のあだ名は『マジメ』だった私は、国公立を出て、犯罪とは無縁の真面目一筋な私の人生において、凶悪な犯罪者を相手にするなど、想像にもしなかった。

父は別の刑務所で看守長を勤めていたが、同じ道を歩むな

今日のように、新しく収監される囚人がくる日は特に緊張が収まらない。

初日の囚人は私のようにかはわからないが、緊張や不安からか、気が荒くなっていることが多い。

実際は、囚人が看守を襲うことにはデメリットが大きすぎるためかあまりないことだ。

だが、それもこの刑務所の中に居ればわかることであり、初日の囚人にこの法則は及ばない。

まずこのM刑務所が『重犯罪』を犯した者を収監するという特質から考えても、

少しでも気を抜けばいつ襲われるかもわからない状況なのだ。

それに加え、囚人同士の喧嘩だつてある。

衆人同士の喧嘩の場合は、刑務所内での立場や、存在が確立するメリットがある為よく起こる。

それを理由に看守は囚人に激しい暴力等の虐待行為に至るわけだが、それを受けてでも囚人にとってこの刑務所という閉鎖された空間では自分の立場というものは重要なようだ。

それを確立する為に必要なことは何も喧嘩だけではない。

他にも、看守と通じて物品を売買したり、

多くの情報を得ているような利用価値のある奴や、経歴だ。

本来であれば、窃盗や、暴行などと色々な経歴の囚人がいる為、殺人などの犯罪者は一目置かれることが多い。

だが、このM刑務所の場合は違う。

ほとんどの囚人が殺人を犯している為、刑期によって判断されることが多い。

要するに、殺害を犯した動機や、人数、殺害方法によって判断されるようだ。

死刑を抑制すべきという声が高まり、今ではほとんど死刑判決を受ける者はいない。

死刑がほとんど行われないこの国で、いかに残酷であつたをもの語るのには刑期の長さだ。

そうして皆、確固たる立場を確立させ、自分自身の身を守る必要がある。

このM刑務所には囚人が休まる場所などないのだ。被害者からすれば、願ったりな環境だろう。

「時間だ」笹森先輩の声に我に返り、私は気を引き締めた。

私より1年先輩と、ベテラン枠の先輩に連れられて入ってきた。その男はやや足を引きずりながらも、鋭い眼光で自らの道を塞ぐ我々を睨んでいる。

ここに連れられてくる犯罪者達は、往々にして社会や他人に対して恨み辛みを抱いている者が多い。

そして、噛み付かんばかりに反抗心をあらわにする。

この男もそんな風だった。

私は男を部屋へと連れて行くの役目だ。

先輩達からその男を引き継ぎ、静かな廊下を二人で歩く。今は刑務作業時間の為、この館内には事実上二人きりだ。

案内し終え、館内での説明をする。

男は特にきくでもない。

私は強めに時間厳守であることや、ここの規律を守ることの重要性を話した。

すると、男は私に向かって暴言を羅列した。

勢いよく飛び出し続ける暴言に感心すらした。

私「君は頭がいいね。だけどパンクロックの蛇口でもひねってしまつたかと思つたよ。」

私はなだめ付けさせる為に冗談めいたことを口にし、他の看守には絶対に言っではいけないとだけ注意した。

すると男はその返答として、私の顔に唾をはきかけて背中を向けた。

（殴られなかったただけかしか・・・）

そう思いながら、私は房にしっかりと鍵をかけてあとにした。

看守部屋に戻ると、笹森先輩に呼び出された。

私「笹森先輩、何でしょうか？」

笹森「うん、お前はさっきのやつの経歴はきいたか？」

静かな顔で私に質問する笹森先輩はいつもと様子が違っていた。

私「いえ、何も。きいておいた方が良かったですか？」

基本的には聞いてく必要があるのだが、

私のように慣れない者がきくと、

先に脅えが入り支障を来たす場合がある為きかされないこともある。今回も聞かされはならず、よほど凶悪なのだろうかと思っていたところだった。

笹森「ならいい。お前はあいつの担当はしなくていいからな。」

特に珍しいことでもないので、了承した。

名前くらいは確認しておくべきだったと反省し、笹森先輩に尋ねた。

笹森「川島。死刑囚だ」

名前と刑期をきき、私はそのまま自席に戻った。

そうして2ヶ月が過ぎた頃、囚人同士の喧嘩騒ぎが起こった。

囚人同士の喧嘩を仲裁するのは先輩方の仕事、いや、気晴らしだ。

私は看守室に残り、他の先輩は警棒を持って慌てて止めに行く。

案の定、戻ってきた先輩方の興奮した顔と話をきくと、囚人は皆手酷くされたようだ。

その中にはあの川島という男も含まれていた。

川島はひどく凶暴で、手がつけられなかったそうだ。

大方囚人を落ち着かせたものの、川島だけが怒りを爆発させ続けたという。

囚人を人形か何かとしか思っていない先輩達ですら、焦りを感じたという。

そして、4人がかりで川島を取り押さえ、

拘束具を取り付けられた姿で独房へと放り込まれたようだ。

独房は通称『トレーニングルーム』と呼ばれており、

一汗かきにいくと言ってはそこに気に入らない囚人をいれ、

自由のきかない状態におかれた囚人をサンドバックがわりにする。

中にはそれ以外の方法で痛めつける者もいるときく。

川島の凶暴さから、野生の虎を捕まえたような感覚なのだろうか。

誰もがわれ先にとトレーニングルームの使用を希望した。

学生時代にラグビーをしていた体格の良い一人の看守が1番手となつた。

拘束具で固定されているとはいえ、皆やはり恐怖はあるのだろう。

ある程度痛めつけられたあと、自分もその痛みを増幅させる役割を担いたいらしい。

正直、館内でのこの習慣には私はついていけない。

皆看守同士でいる時には冗談を言い合ったり、家族の話をしたりと、普段はの顔は穏やかだ。

だが、どこにそのような病気じみた狂気を隠し持っているのか、

その習慣を良しとしている仲間の顔は私にはどうも慣れない。

ただ、それを私にも強要しないことにおいてはまともなのだろうと思う。

もしくは、私の父が別の刑務所で館長をしていることを知ってか、私にはあまり知られたくないだけかもしれないが。

騒動から2週間後、看守同士が楽しげに話していたので話に加わろうとした時、

その内の一人が、川島の拘束具を外し忘れたと笑って話ているのが聞こえた。

どうせ死ぬんだしと別に構わんだろうと。

私は話には加わず、慌てて独房へ向かった。

もともと死刑囚は独房なのだが、『トレーニングルーム』は一番奥の窓のない場所をさす。

廊下をはさんで対向している独房の中で、『トレーニングルーム』と呼ばれる房は4室。

今は2室が埋まっており、1室は昨日看守の呼びかけを無視したという理由で入れられており、

拘束具は外されているようだ。

その男にも後で医務室へ連れて行ってやると告げて、まずは川島の方を出してやらねばと思い、

川島らしき塊を見つけた。

房の中に入る前から、糞尿や汗だろうか？異臭が立ち込めている。

拘束具にしっかりと身を包まれ、芋虫のような姿の川島らしきものに恐る恐る近づいた。

声をかけるが返答はない。

拘束具の上から軽くゆすつて見たがぐったりとしてやはり返答はない。

もしや本当に死んでしまったかと思い私は焦りはじめた。

急いで拘束具を脱がしてやると、初日に勢い良く私をなじっていた姿などどこにもなかった。

飲まず食わずのやせ細った体は限界まで衰弱し、暴行の跡は化膿していた。

身長168センチと元々小柄な男だけに、脂肪をなくした体は軽く、

私一人でも医務室まで彼を届けることが出来た。

医務室まで運ぶと、医師は少し驚いた様子を見せたが特に慌てる様子もなく、

回転椅子をくるりと軽快にまわし、川島を見た。

医師「いやいや、今回はまた手酷くやられているね。」

私「楽しげにしている場合じゃないですよ！2週間も放置されていたんです。早く手当てを！」

慌てて言う私に対して、あくまでも冷静、むしろ楽しんでいるように医師は言う。

医師「まあ見てやるとも。今月の死亡数はもういっぱいだね。来月当りに繰り越してやらんとな」

そう。あまりにも館内で実刑以外の死亡者が出ると、監査でひつかかる。

そうになると、看守指導が行われるうえに、

それらをかぎつけてマスコミに実態を暴かれてもしたら大変だ。

今まで死亡した受刑者を総合すると、問題がないとはいい切れないはずだが、

何も言われないところを見ると、その監査もろくに機能はしていないと思われる。

私が息を切らしながら医師の作業を待っていると、医師は笑った。

医師「だあゝいじょうぶさ。生かすよ。今回はあんたが見ていたんだからな」

ニヤリと口もとだけを持ち上げて笑う顔に少し腹立たしさを感じたが、私の要素の中で今この状況で役に立つことがあったのだから良しとした。

一応見届けたいということを申し出た。

許可を得たので、

医務室の、同じく回転する背もたれのない安っぽい椅子に腰かけ待つことにした。

医療に関する知識は皆無だが、手際よく治療されているのは見てとれた。

極度の栄養不足、殴打による打撲、大小の裂傷に加え、先ほどまでは気がつかなかったが

右足の膝から下はあらぬ方向に向いていた。

右手の親指と人差し指、左手の薬指も折られていたようだ。

それらを全て正しく処置していく姿を見届け、

あとは意識が戻るかどうかの問題だと言われたので私は業務に戻ることにした。

『トレーニングルーム』にもう一人倒れているから治療してほしいと伝え、医務室を出た。

種（後書き）

15 Rはじめました。

色々なお話にチャレンジしたいと思います。

文章のルールのものは勉強中なので、読み辛さはご容赦下さい。
18歳以上の方は他の作品も宜しく願います。

芽吹き

この世の中はクソツタレだ。

偽善者だらけで、欺瞞に満ちている。

愛を語るやつは、俺から見ればただのエゴイストだ。

優しさを語るやつらはもっとたちが悪い。

思いやりってやつを装備して、だれかれ構わずぶん回しやる。どっから見たってテロリズムだっていうのに、それに気付こうともしない。

ああ、あとあれだ、教育だ。勉強で腹が膨れたことなんて1度もねえ。

アホ共を一掃するのにいちいち数なんか数えてられるかよ。

それから、最後に言っておく。

俺をそこらへんの反社会派みたいなガキと一緒にしないでくれないでくれよ。

俺はただのクズだ。

これは彼が10日目に書いた手紙だ。

彼は手紙とは言わず、手記みたいなものだと言っていたけど、受け取ったこの1冊のノートには、誰かに分って欲しいという気持ちで沢山詰まっている気がしてならない。

彼が房を出る時、時間がない中で私は彼から直接このノートを受け取った。

この程度の物なら私が後で回収することは容易なことだ。特に彼には所持品もなく、唯一の遺留品となるのはこのノートだけだったから余計だ。

だが彼は直接手渡したのだ。

鉛筆やペン等の先の尖った物は囚人に与えてはならないという規則は知っていただろうから、私が与えたことをバレないようにした

のかとも思ったが、ここの規則が看守に対して厳しくないことも彼は知っていたはずだ。だから彼の感情が沢山詰まったこのノートを直接手渡された時、私はこれを彼からの手紙だとそう思った。死刑を執行される為、私の前から連れられる直前の話だ。

ノートの裏面を見ると、そこには川島一侘かわしまいつたと大きく力強い筆圧で書かれていた。これは彼の名前だ。

私が彼と過ごした2年間には、思い出とよなれるものがあつた。

このノートもそのひとつだ。

私は彼に、ノートを手渡した後、表面上キレイなままのノートを見て、名前は書かないのかと尋ねたことがある。刑務所の中では自分の所持品には必ず名前を書かなくてはならない。衣服、下着類に至るまですべてだ。そうでなければ盗まれた時や、破けたり破損した場合に、新たに用意されるまでに時間がかかる。すると、彼はノートの裏を私に見えるように堂々と見せびらかした。あまりの字の大きさと、黒く太くアートのように描かれた名前に、彼の生きるエネルギーをそこに感じた。

ところで、なぜ表紙ではなく裏なのか気になった私は、彼に質問してみた。彼は最初、ぶつきらぼうにうるさいとだけ言い、教えてくれなかったのだが私が房を離れる前に「梓にはまるような男じゃないからだ」と、さつき教えてくれても良さそうなほどに堂々と少し威張って教えてくれた。私は少し笑ってしまったが、なるほどと納得できた。

本来、死刑囚と仲良くするなど正気の沙汰ではない。看守仲間にもイカれたのかと心配されていた。私自身もそう思う。だが、彼に対する興味は抑えることは出来なかった。彼のように頭が良く、小柄とはいえ整った顔立ちで女性にもモテそうな青年が、この死刑制度が廃止に向かっている国でなぜ死刑囚になったのか。もちろん好奇心もあつたが、彼の中で大きく育つ闇を、私にはどうしても理解出来なかった。彼を知りたかったのだ。

彼が看守に手酷く虐待を受けた時、私はあの後囚人に対する扱い

を改めるよう仲間に異議を唱えた。あまりの剣幕に、皆その場は了承してくれていたが、虐待自体はなくなることはなかった。

彼の容態が気に掛かり、医務室を訪れては手荒い看護をされていないか確認しに行った。というのも、本来であれば、刑務所内に医療の設備は充実しておらず、外の病院へ一時的に手術や治療を受けるのが通常なのだが、この虐待が横行しているR刑務所では頻繁に搬送されることが予想されているせい、ある程度の怪我に対応出来るよう設備が整えられている。それが良い場合もあるが、悪く言えば、この刑務所から外部に漏れる情報はないと言うことだ。医務室ですら油断ならない。

暴行を受けた日数よりも早く回復する彼に、医師を驚いていた彼のすさまじい生命力を目の当たりにしたのはこの時が初めてだった。

意識を取り戻し、順調に回復したので房に戻されることになった。

松葉杖は与えることが出来ない為、房までは車椅子が使われた。それには私も同行し、医師と二人で死刑囚038番用の房へ向かった。

部屋の中央でよろよろと車椅子から立ち上がった時、医師すばやく車椅子を後ろへ引いた。彼はまだ立ち上がる準備が出来ておらず後ろへ倒れた。ケタケタと笑う医師を押しつけて彼に手を貸そうと近づいた。するとすぐに払いのけられてしまった。

川島「なんだ？腕を折り忘れたのか？」

冗談めいてそう言った彼の目には、冗談は一欠けらも宿していなかった。

医師「それはまたの機会にするよ。お大事に。」

医師は笑いながら車椅子を押して医務室へ帰っていった。

背中から煙のように怒りを発する彼に、近づくのは恐ろしかったのだが、順調に回復しているとはいえ、やはり怪我人だ。私はしゃがみ込み、もう一度彼に手を差し出した。

私「手を貸すだけだ。」

そう一言付け加えると、彼はチツと舌打ちをして私の手を無視し、差し出した側の肩に自分の手を乗せ、グッと力を込めて立ち上がるうとした。だが、片足の不自由さに慣れない彼は、私の反対側へと体制を崩した。慌てて彼の体ごと抱きしめる形で支えようと、右頬を思い切り殴られた。

川島「いいか！ 気安く俺に触るんじゃないやねえ！ 次やったら喉元食いちぎってやる！」

何に興奮し、そもそも何が起こったのか全く理解出来ない状態だった。だが、どうにも落ち着きを見せないようなので、私は房を出ることにした。

看守室に戻ると、右頬の腫れについて笹森先輩に聞かれ、慌てて扉に挟まったと言った。ついた嘘が嘘すぎて部屋の中に居た看守に「一斉に「は？」と言われてしまったが、誰かが笑ったおかげでその場は追求だされることがなく笑いで収まった。

翌日、私はまた彼の様子を見に行った。

房の前には手のつけられていない食事が置かれてある。やはりまだ食欲がないのかと思い、房を覗き彼に声をかけた。

私「まだ食欲が戻らないかい？」

彼は昨日の位置からほぼ変わらない場所で大の字に寝そべっている。目をつむり返事はない。

私「少しは食べた方がいいぞ」

また声をかけた。めんどくさそうに顔を若干歪めた。

川島「てめえが食え」

私「私はもう食べたよ。これは君の分だ」

そう言うのと、彼は目をあけてこちらを睨む。

川島「てめえもしょんべんする場所間違えたのかよ。」

私は彼の言った言葉の意味がわからず、どうゆうことが尋ねたが、答えてはくれなかった。何か食べやすい物がないか食堂できいて来る事にしようと、手付かずに置かれていた食器を持ち上げると、変

な二オイがすることに気付いた。ご飯が入った茶碗には黄色い茶漬け状になったご飯。他のおかずが入る食器も同じ状態だった。医務室から戻った早々からこのようなことが開始されるとは思ってもおらず、すぐに取り替えてやった。だが彼は二度と私を含め、看守達に用意される食べ物に口をつけることはなかった。

傷の癒えた彼は囚人同士ですでに存在を確立されており、運動の時間などで外に出た時に他の囚人達に食べ物を用意させて腹を満たしていた。

私からの食べ物も受け取らないので、彼に食べ物を用意している囚人に、少しでも良い物を食べさせてやってくれと時々千円札を手渡した。

何も善意でやっているわけではない。彼が言っていたように、優しさや同情の類でやっているつもりもない。

死刑という極刑で罪を償うことが決まっている彼に、これ以上自らが犯した罪から目を背けるようなことが起きないようしたかった。死刑囚という彼に興味があるのはあくまでもプライベートな部分だ。彼がここに死刑囚として収監されているということは、必ず被害者が存在するということを私は理解している。

死刑という制度が償いではなく、犯罪の予防や、改善の見込めない者には相当の処罰を持つて然るべきであるという考え方から思だという。それは社会的なことであり、その時点で被害者も加害者もなくなる。【この事件は死刑。はい、次に備えましょう。】もちろんそんな簡単なことでは決していない。だけれども、微かでもそんな風にも思えてしまう。それならば、被害者にとっての救済はどこにあるのだろうか。

このR刑務所配属されてから幾度となく自分自身に問うてきた質問だ。

被害者のことを思えば、虐待もあつていいのだろうか。死んで償うべきだ。色々な考えに至った。だが、彼が来てから違う考えが浮かぶようになった。看守に虐待されながら死刑を待ちわび、怒りと

失望に身を包む姿には、被害者のことなどどこにもない。加害者である本人が罪を意識していないからだ。説法には耳を貸さず、与えられる暴力には暴力で返す。外も中も何も変わらない。私は数少ない死刑囚に限らず、このR刑務所に収監される囚人は、罪を犯した人間という意味で皆同じなのだという考えに至った。そして、静かに考え、自分を見つめる時間をこの刑務所の中で持つて欲しいとも思うようになった。

いつか、自らが犯した罪に気付けるように。言葉や、刑期では言い表せない程の謝罪を被害者に思えるように。

だが、このことを彼に話すと、「あんたが一番残酷だ」と言われた。

「誰も望んでいない謝罪、到底気付くことのない加害者、このまま死刑がなくなれば、ムシヨの中なら金の心配しなくてすむって考えの奴ばかりで満員になる。さつさと殺すのが一番だ。世の中は何も変わらない」と彼は言っていた。

それでも、誰かが少しでも思ったことを行動に移せば、世界の何かは変わるさと引き下がらずに言ってみた。すると彼は私に「頑固ヤロー」とあだ名をつけた。

正直、彼と出合ってから初めて体験することばかりだ。そもそもこんなにも自分の考えを口にしたこともなかった。考えなど他人と分かり合えないものだとしてそれこそ私自身が諦めてばかりだった。だが、彼にどことなく自分に似たものを感じた私は彼と話さずにはいられなかった。

食事係りの囚人が、私が与えた金のことを彼に話したことも彼が私の話をきいてくれるようになったきっかけにはなっていたかもしれない。

開花

いくらか会話が出来るようになったころ、私は彼にある質問をした。「君の罪状は何か」と。すると彼は「死刑を宣告されるようなこと」とだけ返した。

正直、私が赴任してから死刑を宣告された者は彼を除いていなかったため、どんなことをすれば死刑を宣告されるのかと思いつく間が生まれてしまった。ふむ・・・と考えていると、彼に「アホか。先に調べとくもんだ」と叱かれた。そして、彼は鋭い目つきをこちらに向け、私に強く言い放つ。

川島「俺がどれだけ凶悪な人間か、罪名が証明しているんだ。気を抜いてるとテメーの首もいつまで体と繋がってるかわかんねえぞ。」それをきき、私が「忠告ありがとう」と返したことが気にいらなかったらしく、あっちに行けと追い払われてしまい、詳しく聞くことはできなかった。

笹森先輩や、他の看守仲間が言う程の狂気をどうしても彼に感じることが出来なかった。もちろん、彼が言う通り、裁判による審判で下された罪名はこの上ない凶悪なものだ。私が鈍感なだけなのだろう。だが、先ほどのような脅しに対しても、恐怖や畏怖の念よりも先に、彼の優しさを感じずにはいられないのだ。そうして、彼がどのようなことでここへ収監され、死刑を宣告されたのかようやく気になり始めた。自分が担当している階とは違うので、看守室で川島を担当する仲間に聞く必要があるが大抵のことは聞く事ができるだろう。本来ならば看守同士とはいえ、担当外の者の情報を話すことは神経を使う必要があるはずなのだが、ここではそのようなことはない。

いつもの通り見回りを済まし、看守室へと戻った。看守室とつけられていても、囚人達のいる部屋と作りに大差はない。グレー一色の壁に、同じくグレーのデスク。その他も統一感溢れるグレーの物

ばかりだ。一年中寒々としていて、こちらまで閉じ込められている気になる。

中では数人の看守が談笑していた。その中から、川島の担当をしている奴を見つけ、話しかけた。

「川島のことをききたいのだが少しいいか？」

なんでも話てやるというので、どのような罪を犯したのかを質問した。

看守はニヤリと不愉快な笑みを浮かべ、「あいつは間違いなくこのムシヨの中で一番の悪だね」と言った。なんだか『ワル』という言い方になぜだかこちらが恥ずかしさを感じたのだが、この凶悪犯罪者が溢れかえる刑務所の中で、あの青年が1番だということに少々納得がいかず、それについて聞き返した。「殺した人数、殺し方、法廷内での態度、どれをとっても一級品だ」と、自分自身が何かをやり遂げたかのような威張り具合でさらに返された。またもや恥ずかしさがこみ上げたが、その感情には見て見ぬフリをして自分の記憶を辿ることにした。私の棟には10人殺害した男がいる。殺害されたのは皆女性ばかりだ。強盗、強姦、殺人。罪名のオンパレードのような男だ。他にも、3歳〜8歳までの幼女だけを狙って強姦し殺害した者。どれもこれもが残忍極まることばかりだ。看守は私の顔を見て納得がいっていないのを感じ取った。そもそもその顔を待っていたのだろうか、またニヤリと笑みを浮かべ、嬉々として説明をしだした。

そいつの話によると、川島に殺された被害者は全部で22人。外国に行けば、35人なんて強者もいるみたいたが、この日本でそれだけの人数を殺害した犯人はいない。正確にいうと、捕まった者の中には被害者のことを覚えていないやつらもいるので、正確な被害者の数が出てこないことがある。現在捕まって被害者の数が明らかなのの中にはいないということだ。

殺害現場は▲▲区の教会。川島が殺害した22人の内、4・5歳の子供も3人含まれており、殺害前に強姦されていた。あとは教会

の信者と思われる人達だ。有名なIT社長も被害者の中にいたということも大きな話題となる要因のひとつだった。他の死体も状態は酷い有様で、腸が60cmも飛び出していたそうだった。法廷で陪審員として出廷していた者は皆裁判後に心のケアが必要になったという。ただその裁判で明らかになったのは彼の残虐性だけではなかった。彼は身寄りがなく孤児として里親に育てられていたそうだった。この里親も被害者の一人となったのだが、その里親がこの協会の信者だった。彼もその協会へ通っていたという訳だ。そして、その協会では、一見すれば普通の協会だが、実のところ怪しげな新興宗教となんら変わりなかった。信者同士の暴力行為や、一方的に受ける等の被害者も居たそうだった。何かしら問題のあった場所だったということが露呈された。彼自身もそういった暴力行為を受けていたと弁護士が力説していたが、それらが明らかになったところで彼の残虐性には大いに劣る。法廷内での彼はいつもひどく苛立っていて、陪審員や、法廷を傍聴している者、新聞にしようと取材にきている記者達に向かって、始終暴言を吐いていた。あまりにも態度が悪いということ、幾度と退廷命令が下されたそうだった。神聖な場所で行われた今までに類のない惨い事件、印象は最悪、反省も見えない。そして、何よりも本人が死刑を望んでいたということ。全てを憎み、全てに怒りをぶつけたのだろうか。彼のニュースは2ヶ月近く続き、毎日のように放送され続け色々なメディアで取り沙汰された。自由に論議を交わすコメンテーターに、すぐに関心を失う視聴者もやはり気になるせいか6ヶ月以上経つ今でも、メディアの人間は2、3人堀の近くにいる。彼の凶暴性は捕まっただけで収まらないだろうということだそうだった。

そうした話をきき、やはり彼には償いの心を宿すべきだという思いに至った。環境が彼をそのような怪物に仕立てたのなら、環境によって改善することも可能性はあるということだ。時間の経過により彼の中にも反省の気持ちが生まれているかもしれないと考えた。もし、小さな反省という気持ちが生まれたのなら、彼が天寿を全う

するまでに育てなければいけない。怒りだけの人生で終わってはいけない。

その後、私は変わらず彼に会いに行った。自分を育てた里親ですら殺害してしまった彼に会いに来る客人はいない。もともと、看守はストレス発散であいも変わらず彼をサンドバック代わりにしているようだが。

初めは面倒がつていたが、話をするようになってからは機嫌さえ損なわなければなんとか会話にもなるようになった。今まではアホだのボケだのと会話にならなかったで、これも大きな進歩といえるのだ。私が暴力を振るわないことだけは理解してくれているようで、私が行くと幾分リラックスしているように見えた。

ある日、彼はノートが欲しいと言い出した。何を書くのかと聞くと少し沈んだ顔をしたように見えたのが気になったが「手記みたいなものだ」と言った彼はいつもの傲慢さを帯びた顔だった。禁止されているのだが、何度も言うようにこの刑務所の規則に対する緩さは一番だ。手に入れることも与えることも容易い。私はすぐに用意してやり、彼に手渡した。

川島「本当にこのムシヨはユルユルだな。いいのかよ。禁止されているんだろ」

彼は腕を組み、左側の口角を上げた。

「私以外には見つかるなよ」見つければ私ではなく彼が手酷い仕打ちを受けることになるので、一言だけ忠告し、去ろうとした時彼は私を呼び止めた。

川島「別に誰にも見せる気なんかねえよ。だがあんたには俺がしたことのを話してもいいかなと思ってる。」

いままでに見たことのない真剣な眼差しだった。したことの全てとは彼の犯した罪ということだ。それを話すということに私は驚いた。川島「腑抜けたツラ見せてんじゃねえよ。殴るぞ。別に話すとは言っていないぞ。話てもいいかなと思ってるってただけだ」

そう言って彼は私に背を向けて早速何やら書きだしていた。

抱え込んだ己の罪を人に話すということ自体大きなハードルになるだろうが、実際に話すことよりも、話そうと思ったことが大きな一歩だ。彼は私が試みていることを知りながらもそんな風に思ってくれたことは正直嬉しかった。

私は彼のノートをパラパラとめくった。

20日目に書かれた内容を見ると、私に変なあだ名がつけられており、私の人生が妄想されていた。

あだ名は『マジ頑固』と『しめじ頑固』だった。どうしても私からは頑固を外せないらしい。

学生時代のマジメに更に頑固がつくとただの厄介者ではないかと思いつながら、彼の文面に少し穏やかさが宿って見えた。そこには勝手な想像を膨らませながら書かれた私の人生だった。

マジ頑固は子供の頃からマジ頑固だったんだろう。ガキの頃は家の中で本ばかり読んでる真っ白いしめじやロー。親父にしかられることなんてなくて、クソがつくほどの大真面目なクソつまらないやつだっただろう。大学まで真面目一直線、どうせ親父の跡を継ぐとかで公務員にでもなったんだろうけど、マジ頑固にここは勤まらねえな。クソがつくほどの真面目さと、抜けっぷりは俺の殺る気も失せるくらいだ。本来なら数十回と殺してるところだ。クソつまんねえ上に、これからもつまらねえ人生を送るんだろさ。女子アナみたいになつまんねえ完璧風女と結婚して、ガキの2、3人生まれて、家族写真をバカみたいにポケットに忍ばせるようなくそつたれの人生だ。レールの上に乗っかってるみたいに外れることのない生。しめじ頑固にはピッタリだ。さっさとムシヨなんかやめることをお勧めするね。いつか俺みたいなバカにいたぶられる前に。

バカ丸出しでレールの上に乗っかってりゃいいんだよ。それで、じじいになったら頑固な孫におもちゃでもねだられて蹴り入れられ

て困りやいい。

そうなりや俺は大笑いできる。

彼の最後に私は立ち会ってはいない。担当ではないということもそうだが、彼がそれを望まなかったからだ。友人として見届けてやる気持ちもあつたのだが、彼の意見を尊重した。

収容期間4ヶ月という異例の早さで執行されることになり、結局彼が残りの人生を少しでも怒りのない人生になったのかどうかきくことは出来なかったが、まだ読みかけではあるがこのノートからは返事をもらえた気がした。

色々勝手気ままに書いてくれてはいるが、私の人生が幸せなものになると書いてくれていることが彼なりの気遣いのような気がする。やはり彼には優しさがあつた。きっと、環境や、出会った人達によって彼は悪の道へと入り込んでしまったのだろう。そうして、あの大きな殺人事件へと発展してしまったのだ。そう思うと、勝手な感情だが、このノートを見続けることの悲しさに襲われる自分がいた彼の言うルールが少し違っていれば、こんなことにはならなかったのではないかという思いに至るからだ。

恐らく、彼は今まで自分のことを話すことなどなかったに違いな。い。そんな関係性がなかったのか、話すこと自体が嫌だったのかはわからないが、ノートを見ていても手記だといいながら自分に関することはほとんど書かれていない。看守にどこを殴られたとか、囚人仲間のこととかそんなことばかりだった。だがよくよく読んでみると、他人のことばかりだが、自分の主張も含まれている。自分のことを書くことが苦手な彼は、このノートで人を介して自己主張をしていたのだろうか。彼の声を聞こうと、私はいつも彼のノートを見ていた。

しかし、毎日書かれていたのに20日以降何も書かれていないページが続いた。書くことに飽きてしまったのだろうかと思い、パラパラと最後の方まで飛ばしながら見ていくと、末尾までの4ページ

にもなる文章がそこには書かれていた。

これが書かれたのは彼の死刑が執行される前日の日付になっていて、彼の本当の声がそこには書かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7027x/>

落花

2011年11月17日21時04分発行